

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年7月号

平成十八年七月一日発行 第十一の巻第七号  
平成三年九月十八日第二刷発行刷部認可

通巻第 八十一号 (毎月 二 日発行)



華鬘草

高橋将夫

一切の影の消えたる花曇  
油断とは春の障子の隙間なり  
流れたくなさそな雛も流れけり  
何度でも回つてみせる風車

春風が煽つてゐたる心の火  
花屑で埋める心の隙間かな  
重なりて影は一つの春の鴝  
こちらさこ春の闇から呼ばれたる  
渦潮のなかなか渦になりきれず  
晩節の春田を打つてをりにけり  
大日の前も後ろも華鬘草

# 軍 手

栗栖恵通子

大日の耳の金色五月来る  
青月夜薄揚げかるく炙りをり  
考ちちの掌が重なつてゐるほたるかな  
六道を出で羅のまつはれり  
エロイサ・イエツサイム時計草早戻し  
夏蝶の銀粉肺にあふれしむ  
縫代に針うつ八十八夜かな  
短夜のスフインクスにでもなるか  
臍の緒の先の吹かれて帚草  
夕せきじつ日の紫陽花寺に逢ひにいく

## 特別作品

万緑のはじめなりけり孔雀王  
丑の日のことろことろと煮つめをり  
逆夢を海月の出たり入つたり  
屈葬の村の向日葵畑かな  
河童忌や味見小皿の二、三枚  
山椒魚奈落のまなこ開きける  
洗硯の夫の背うすくなりけり  
末伏や五体のツボをさぐりをり  
反魂香加へふたたたび流星群  
干し軍手バリバリ八月十五日

# 槐安集

市場基巳

いち早く冷えよぶ遍路墓あはれ  
春めきて遍路の白のけぶらへり  
暁を香の押しくるはもの芽か  
春に出る寒き日輪かなしけれ  
死なば人還らじ春は冷えに冷ゆ

水野恒彦

春の瀧日暮はいつも遠くより  
春の山悪人虚子の丸き顔  
受胎して楊貴妃桜まぶしみぬ  
天馬逸りて臍せきをのぼりゆく  
墓出でて日波のひびき高まりぬ



延広禎一

天領の木橋を渡る櫻守  
花筏の行方雲中菩薩かな  
水分に魂呼び合へる花時雨  
花籠は恋の重荷よ蓮如ノ忌  
山吹や松煙墨の乾されある

加藤みき

逃水やピッチャーの肩の息遣ひ  
巖山の雨に光りぬ三光鳥  
水無月の茅かやと白紙相あい和わせり  
羊蹄や川幅に水滔滔と  
赤バケツの開店祝鳥曇

石脇みはる

穂の芽や先客のをる閻魔堂  
うしほ吹く鯨おぼろとなりにけり  
とび跳ねる姉妹どうだんつつじかな  
鈴蘭やトランポリンの女の子  
マシユマロや蓬生に日の暮るるまで

中島陽華

夏はじめ大愚良寛出雲崎  
花の色しゃつきりしゃつきり男あり  
いもりの黒焼呑んでをり鯉のぼり  
待ちぬたる虎魚からりと歡喜天  
ゴツドセイブザクイン子安貝あまた

竹内悦子

青饅や夢も現も波羅蜜多  
まむし草髭のぼしをる岬かな  
砂州に鳥山に辛夷の花明り  
春の雲鮠の流れのありにけり  
この山に牛の神ゐて櫻かな

栗栖恵通子

槐庵の日の先分かつ金魚かな  
羅にかくれ死神やりすごす  
うろくずの下の禁色山椒魚  
雲の峰黒いリボンのかけてある  
青月夜なだるる塚の彘偏

大島翠木

天網や身ぬち舞ひゆく花浴びて  
午後は憂し花のふぶきのみだれかな  
弁天へ花の吹雪の近づきぬ  
ランボーの白き星降る落花かな  
晩節の視野春愁の赤ワイン

雨村敏子

京大和へいづれも近しふきのたう  
春の霜踏めばけもの匂ひする  
ふた道に踏み惑ひたる櫻かな  
石膏を溶いてゐたりし目借時  
木の匙に掬ふ朧とヨーグルト

黒田咲子

桜咲く回想シーンより始まる  
砂風呂のよけれ波間の春鷗  
亀鳴くとなにやら妙になつかしき  
揚ひばり雨かくれなく耀ひぬ  
刺なして木洩日に咲く山帰来

本多俊子

養花天西行はどのあたりかな  
千年のさくらの息や宙そらに鳴り  
天竺へつづく杉菜の根となりぬ  
浜風のまだ冷たしや桜鯛  
草若葉よみがへりたるよいとまけ

# 槐市集

秋岡朝子

花冷や城の石垣目が無数  
しらしらとさくらの下を流れけり  
あたたかや雨しみてゆく日暮の木  
もゆるごといつかは死んで春木立  
旅順の丘や日はうらうらと称霊塔

犬塚芳子

連翹や大き法然黒びかり  
沈丁花井戸の深さに吸はれそう  
雨蛙迫り来る闇ゆすぶりぬ  
居開帳散華ひとひらもて帰る  
天帝に穴を開けゆく揚雲雀

岩下芳子

吉兆のとば口なりし雀の子  
入り入りてデルタに拾ふ桜貝  
漆絵の糸のぐの乾く花の風  
びんろうの実を噛みくたく目借時  
黄雀とテナーの歌や子安貝

岩月優美子

天地の膨らむ音や春の闇  
春行くや吉祥天の周りより  
産声の余韻木蓮真白なり  
天空の淡き色なり啄木忌  
すつぽりと黄砂の中の大伽藍



# 槐集

## 高橋将夫選

人影も春満月も平らなり  
枚方

中野 京子

花衣観音山を出でにけり  
枚方

近藤きくえ

青い夜の風におきある沈丁花  
撥音の花吹雪なり弱法師

陽炎の中より現るる鼓笛隊  
穂の芽を佛顔して食うべをり

背にぬくみ前にかげある紫雲英摘み

春宵や積み置く本と砂時計

落椿のくれなゐ土にもどりゆく

星塚を一巡したり柳絮とぶ

春水や転がつてゆく日の欠片かけら

近藤 喜子

雨の日の艶めいてをる座禅草

谷村 幸子

春の野や白きものほど風に乗る

自叙伝が形見となりし竹の秋

龍天に昇りてよりの海の色

鮎子をメモの通りに釘煮にす

春昼の欠伸や仮面つけ直す

ブーメランの杉菜の原を高くとぶ

花の揺れ雲中菩薩おりて来し

真くれなゐの返したくない春シヨール

ヴィオロンの音止み亀の鳴きにけり

岩月優美子

春霰そとほしひめ衣とほしひめ通とほしひめ姫とほしひめの息なりし

竹中 一花

春愁のたとへばロートレックの朱

北斗出て音なく現れし墓

修道女ふはと過ぎたる鹿かな

春宵のふいに食べたき生玉子

バツカスも狸々もある花の下

狼と羊の絵本花は葉に

楊貴妃とクレオパトラと桃の花

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」観照

人影も春満月も平らなり 中野 京子  
一枚の切り絵の世界に誘われる一句。これもまた詩の世界。もっとも、網膜の映像は脳（心）で認識されてはじめて見えたことになる。そこには月は球体という知識も含まれる。

春昼の欠伸や仮面つけ直す 近藤 喜子のどかな春の昼。欠伸をする女。女がやおらかたわらの面をつける。実はこちらが本当の素顔ではないかとドキッとす。

バッカスも狸々もあゝる花の下 岩月優美子  
花見に酒はつきもので、特に目新しくはないが、「バッカス、狸々」とくると句柄がガラッと変わるからおもしろい。

花衣観音山を出でにけり 近藤きくえ  
さりげない叙情。大病を二度克服された作者のおだやかで、前向きな心境が伺える一句。

雨の日の艶めいてをる座禅草 谷村 幸子  
暗紫色の仏焰苞が雨に濡れて艶めいているという。座禅草であるところが俳諧。

真くれなゐの返したくない春シヨール 竹中 一花  
俳句では気持ちをストレートに出さなないものだが、それも時と

場合。「返したくない」で真くれなゐの春シヨールへの愛着がひしひしと伝わってくる。

金丸座奈落に続く花の冷 植木 戴子  
花の冷が奈落へと続いている。金丸座琴平の歌舞伎芝居小屋の奈落の話だが、世の中に通じそう。

たましひを密かに葬る花筏 西村 純太  
水面を流れていく美しい花筏が、実は密かに魂をおくつて行くのだという。たしかに、これもまた桜の本情。

若者の遍路高みに坐りける 中田 禎子  
現代の世相の一端を垣間見るような一句。非難ではないが。

黄塵や汚れちまつた朝と昼 瀬川 公馨  
「汚れつちまつた悲しみに 今日も小雪の降りかかる」という詩の一節（中原中也）が浮かぶ。「悲しみ」でなく、「黄塵と朝昼」であるところが俳諧。

朝桜音なく亀の浮き上る 万城希代子  
朝桜のすがすがしい景のなかに、亀が浮かび上ったところがなんともほほえましい。雅俗融合の一句。

花の渦闇を溶かしてあたりけり 大山 里  
闇の中で花の周りがほんのりと明るい。花明りである。作者の鋭い感性は「花の渦が闇を溶かしている」ととらえた。

（以下略）